

# ふるさとの 其の50 誇り

## 古道を歩く

# 信仰の道～苗敷道～

なえ しき みち



対岸に着くと、現在は、地元の人たちが建てた苗敷道の石碑を見ることができます。葦崎側に広がる穂やかの水田風景を楽しみながらさらに歩を進めると、竹ノ内にある里宮の穂見神社に到着します。さらにここから山道の参道を登ると、終着点の穂見神社の奥宮にたどり着きます。

古道は、道幅が狭く車では走りづらい道ですが、そこに暮らしそれを

を横断します。かつての御勅使川の河原は現在よりもずっと広いわりに、ところどころに簡易的な橋しか架けられていなかったようです。人々は、河原を歩き、浅瀬を越えたりしながら穂見神社を目指したのでしょうか。

舟で上高砂に入った人々がはるか先に苗敷山を望みながら西へ進むと、市川道と呼ばれる葦崎と市川を南側の「高砂渡し」からはじめます。江戸時代から昭和の初め頃まで、夏季の間、竜王と上高砂を結んでいたのは渡し舟でした。

苗敷道は、現在の信玄橋よりやや南側の「高砂渡し」からはじめます。この時に使われたのが苗敷道でした。

「苗敷」とは、韋崎市旭町上条南割にある苗敷山のことを指しています。苗敷山にはその山頂付近に穂見神社の奥宮と麓には里宮があり、古くから農業の神様として人々の信仰を集めています。お祭りの日になると、旧御影村や竜王村からも多く人々が参詣に訪れたとの証言が残されています。この時に使われたのが苗敷道でした。

八田小学校の北側を通る細い道路。現在は通学路として利用されています。なんの変哲もない道ですが、実は、古くから使われてきた道でもあります。その道の名は「苗敷道」。いったいどんな道だったのでしょうか？

「苗敷」は、韋崎市旭町上条南割集落を抜け、六科に歩を進めるべく洞宗隨心院が現れます。隨心院の西側は、かつての駿信往還との交差点にあたります。そこには地元の人々が大黒天を祭る甲子塔が建てられています。この石造物にも、「西苗志き」とが刻まれ、道標の役割を務めていました。昔の参拝者が道標を見てさぞ安心したことでしょう。

六科の集落を抜けた一気に視界が開け、苗敷山が目前に迫ります。将棋頭に守られ、徳島堰の水で営まれた水田は、棚田のような趣を醸し出しています。

水田を抜けたらいよいよ御勅使川

を利用してきた人々の歴史を記憶し、その一端を現代に垣間見せてくれます。たまにはのんびりと古き道を訪ねてみてはいかがでしょうか。

### 文化財用語の解説

#### 2月号の「安藤家の雛祭り」の主屋（おもや）の表記について

主屋とは敷地内の中心となる建物で、主として人が生活するところです。通常は母屋と表記するのが一般的ですが、文化財建造物の場合、屋根の部材の一部である母屋（もや）と混同するため、主屋と表記するのが通例となっています。